

高等学 校

平成23年度

# 教育研究員研究報告書

## 地理歴史

東京都教育委員会

## 目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	1
III	生徒の現状	2
IV	研究の仮説	6
V	研究の方法	6
VI	研究の内容	7
VII	研究の成果	24
VIII	今後の課題	24

## 研究主題

**「時間軸と空間軸の複眼的視点を重視した授業等についての実践研究 ～ 教科書『江戸から東京へ』を活用して」**

### I 研究主題設定の理由

高等学校学習指導要領解説地理歴史編において、「世界史、日本史、地理それぞれの科目相互の関連を重視」すること、また「生徒の発達の段階や各科目の専門性・系統性に配慮するとともに、地図や年表をはじめとした様々な資料を活用した学習をより一層重視すること」が地理歴史科の「改訂の趣旨」として挙げられている。

ある社会的事象について多面的・多角的に考え、その特質を明らかにしようとする場合、地理歴史科という教科の特性上、時間的なつながりと空間的な広がり把握することは欠かすことはできない。そしてそのためには、地図や年表、史料、統計といった様々な資料を読み解く、または自分の考えをまとめて表現するための手段としてそれらの資料を活用するという力が求められる。しかし後に掲げる都立高校入試結果や地理歴史部会が独自に行ったレディネステストの結果の分析が示すように、全体的な傾向として、生徒にこのような力が不足しているというのが現状である。上に挙げた学習指導要領改訂の趣旨は、まさにこのような現状の改善を図るところにあると言える。

ところで、東京都教育委員会は平成24年度入学生から全ての都立高校において日本史を必修化することとし、独自の科目として「江戸から東京へ」を設置したが、そのねらいを「江戸期から現代に至る近現代史の大きな歴史の流れについて、東京に残る史跡や文化財などの身近な教材を活用して、地理的視点も踏まえて総合的に理解させること」としている。ここには学習指導要領改訂のねらいや、本部会の現状認識と共通の問題意識がある。

以上を踏まえて地理歴史部会では、高校部会全体の主題である「思考力・判断力・表現力の育成を図るための授業」の方法として、社会的事象に迫るために時間的なつながり（＝時間軸）と空間的な広がり（＝空間軸）を明確にすること、またそのためのツールとして教科書『江戸から東京へ』を活用することを二本柱として、実践研究を進めることとした。

### II 研究の視点

ここではまず、研究主題に掲げた「時間軸」と「空間軸」という用語について、その意味を明らかにしておきたい。「時間軸」とは、諸事象の時間的なつながりである。これは対象とする事象そのものが時間（時代）の推移に応じてどのように変化したのかを捉えるとともに、関連する事象との前後関係や因果関係を把握すること、すなわち歴史的なアプローチを通じて得られる視点である。

これに対して「空間軸」とは、諸事象の空間的な広がり（つながり）である。これは対象とする事象について、位置や分布を捉えるとともに、その背景や要因を地域という枠組みの中で、環境条件や他地域との結び付きと人間生活との関わりに着目して捉えること、すなわち地理的なアプローチを通じて得られる視点である。「複眼的視点」とあるとおり、対象とする事象について、二つの異なる視点から捉えることで、多面的・多角的な考察を促し、事象

の特質を明らかにすることができるであろう。

さて、教科書『江戸から東京へ』は、江戸・東京の史跡や文化財など身近な事物を切り口とすることで、日本の近現代史に対する生徒の興味・関心を引き出すような内容・構成となっている。そこで本研究にあたって、本部会ではこの教科書の特色を活用することで時間軸と空間軸を明確にする、というねらいをもって学習指導案を作成し、検証授業を行った。なお、ここで言う「活用する」ということの意味は、『江戸から東京へ』の具体的な記載内容や掲載資料そのものを利用することだけではなく、この教科書の内容・構成にみられるような方法を用いて、授業展開を構想するということである。

### Ⅲ 生徒の現状

#### 1 「東京都立高等学校入学者選抜学力検査結果に関する調査」報告書

平成23年度「東京都立高等学校入学者選抜学力検査結果に関する調査」報告書（東京都教育委員会）の「IV調査結果—2各教科—（4）社会—オまとめと指導の改善の視点」には、次のように示されている。

- (ア) 地理的分野については、地形図の読み取りや景観の観察といった地理的スキルは身に付いてきている。今後も、地域調査などの具体的な活動を通して資料を活用し考察する学習と地図を用いた作業的な学習を、意図的・計画的に取り入れる指導の充実が求められる。
- (イ) 歴史的分野については、個別の歴史的事象を歴史の流れの中で、各時代との関連で理解する力が、例年と同様に不足している。特に、近現代の我が国の歴史について、世界の歴史を背景に理解させる指導の充実が求められる。
- (エ) 論述問題については、前提となる基礎的・基本的な事項の理解だけでなく、それぞれの資料を総合的に考察し、結論を導き出す力が不十分である。身近な社会事象に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、適切に表現する力の育成を重視する指導の充実が求められる。

※(ウ)は公民的分野に関するコメントのため省略

この報告書では、生徒の現状として、多面的・多角的な考察力、適切な表現力が不十分であることが指摘されている。そこで、実践研究を行うに当たって本部会の研究主題である「時間軸と空間軸の複眼的視点」に関する力をより詳細に把握するために「基本的知識・技能を習得しているか」、「事象を時系列で捉えることができるか」、「事象を位置や分布で捉えることができるか」、「諸資料を活用して多面的・多角的に考えることができるか」、「考えた内容を自分の言葉でまとめ、表現できるか」という点について、レディネステストを実施し検証を試みることにした。

#### 2 レディネステストについて

##### (1) レディネステスト実施の概要

このレディネステストは、都立高校6校の1～3年生の生徒計201人を対象に実施した。レ

ディネステストの形式は、Ⅰ～Ⅲの大問を出題し、Ⅳでは生徒の中学校・高等学校の社会科・地理歴史科の授業内での発表経験と、発表の結果を確かめるアンケートを実施した。

それぞれの出題のねらいは次のとおりである。

- Ⅰ・Ⅲ(1)(2)は基礎的・基本的な知識・技能の習得状況の把握  
 Ⅱは時間軸を通して思考・判断・表現する力の把握  
 Ⅲ(3)は時間軸と空間軸の複眼的視点から思考・判断・表現する力の把握

実施時間はアンケートを含めて30分である。

なお、本報告書では紙面の都合上レディネステストの大問ⅡとⅢの問題の抜粋とその結果の分析を中心に述べる。また、レディネステストに掲載した図・写真・絵・年表等は本報告では、【 】の部分に資料名のみを記載した。

## (2) 時間軸を通して思考・判断・表現する力を問う問題

Ⅱ

(1) 下のA・Bの絵は欧化政策を象徴する鹿鳴館の舞踏会の様子を描いています。当時外務卿（外務大臣）であった井上馨は、なぜこのような外交政策を行ったのか、A・Bの絵と年表に基づいて答えなさい。

【A：舞踏会の絵】【B：ビゴー作「名磨行」の絵】【C：条約改正交渉略年表（1854～1883）】

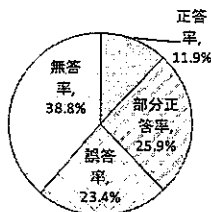
(2) 下の図A、Bは、ともに隅田川にかけられた「千住大橋」です。Aは明治時代に木で作られ、Bは関東大震災後に鉄で作られました。また、Cは関東大震災における被災の様子を描いたものです。AからBへと橋の作り方が変化した理由について、Cの画像を踏まえて説明しなさい。

【A：明治期の千住大橋の写真】【B：震災後の千住大橋の写真】【C：震災直後の火災の様子を描いた絵】

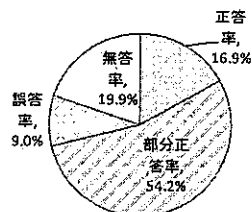
(3) 資料Aは、我が国初の女性議員の写真です。昭和20（1945）年12月に衆議院議員選挙法が改正されたことで、39名の女性議員が誕生しました。資料Bは、昭和21（1946）年に公布された日本国憲法の条文です。資料Aと資料Bを通して、日本国憲法のどのような特色が分かりますか。日本国憲法の三大原則を踏まえて説明しなさい。

【A：国会の女性議員たちの写真】【B：日本国憲法第44条の条文】

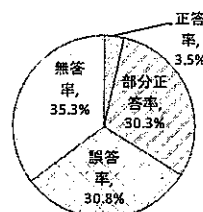
Ⅱ (1)



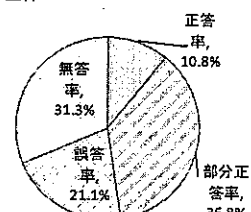
(2)



(3)



全体



Ⅱは、与えられた資料と歴史的事象を時系列で捉えたり関連付けたりして、多面的・多角的に考察し、判断した内容を論理的な文章として表現する力を問う問題である。

Ⅱ全体の平均値では、完全な正解を論述できた生徒は10.8%であり、部分正答率と誤答率を合わせると57.9%となっており、無答率の割合は31.3%である。

(1)は、欧化政策の目的について、資料を活用して記述させる問題である。近代化のアピールと条約改正という目的のいずれかのみを説明している場合は部分点とした。無答率が38.8%と今回の全ての問題の中で最も高い。正答率は部分正答を含めても37.8%である。誤答としては、「欧米のまねをして一緒に踊り、仲良くなろうとしたため」といった解答が多かった。鹿鳴館

での洋装の日本人の絵と条約改正に関する年表という二つの資料を関連付けて考えることができる生徒が 11.9%であったことは、思考力や表現力が不十分であるという事実に加えて、中学校段階での欧化政策や条約改正という歴史的事象についての基礎的・基本的知識の習得が不十分である状況や、そのような言葉の内容にまで理解が深まっていないといった状況が考えられる。

(2)は、関東大震災の前後の橋梁<sup>りょう</sup>の違いについて、その理由を資料に基づいて記述させる問題である。設問中において明治時代から関東大震災後への時間の流れは示されており、資料から因果関係の一つ（耐火性について）を把握することは比較的容易な設問となっている。耐火性と耐震性のいずれかのみを説明している場合は部分点とした。誤答率が 9.0%であるのに無答率が 19.9%である。これは記述を求める問題に答えることを最初から敬遠してしまう生徒が少なくないからと考えられる。

(3)は、日本国憲法の特色について、二つの資料を関連付けて説明させる問題である。憲法の特色は述べられていても、片方の資料のみを活用している場合と資料を活用しないで答えている場合は部分点とした。無答率は 35.3%であり、今回の全問題の中で 2 番目に高い。資料を関連付けて考察しまとめて表現する力が不足していることと公民科の知識が十分でないことが考えられる。

以上から、歴史事象を時系列で捉えて、その因果関係を理解し、提示されている資料を正しく活用し、事象の理由や特徴を表現する力が不足していると考えられる。

### (3) 時間軸と空間軸の複眼的視点から思考・判断・表現する力を問う問題

Ⅳ

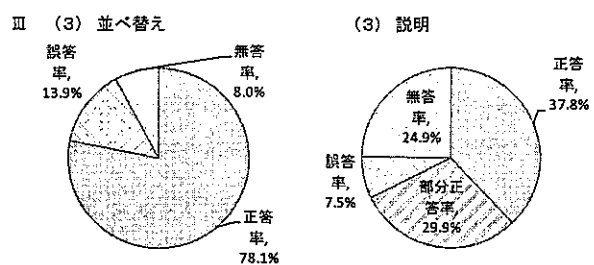
(3) <別紙>①～③は東京の東地域を示した地形図で、大正・昭和・平成のものです。①～③を古いものから年代順に並べなさい。また、そのように並べた理由を二つ以上挙げて説明しなさい。昔の地図記号の一部を参考として示しますが、基本的には中学校で学習した地図記号を基に考えなさい。

<別紙>【①：昭和期の地形図】【②：平成期の地形図】【③：大正期の地形図】 参考【昔の地図記号】

Ⅳは、新旧の 3 枚の地形図から地理的事象の位置や分布を読み取り、これを時系列に並びかえてその理由を説明することで、時間軸と空間軸の複眼的視点から思考・判断・表現する力を問う問題である。一つの理由のみで説明しているものは部分点とした。

この並べ替えの正答率は 78.1%と今回のレディネステストの中で最も高い。一方無答率は 8.0%である。しかしその理由を求めると、部分正答も含めても正答率は 67.7%、無答率が 24.9%となる。理由の説明では、三つの地形図を比較して時間的推移による地域の変容の点から説明している解答よりも、一つの地形図の特徴のみを示して説明しているものが多く見られた。また、文章表現力の不足している解答もあった。

以上から、地形図に関する知識・技能はある程度は身に付いているものの、地形図の新旧の判別理由を説明できない生徒が少なからずいることから、空間軸とともに時間軸の視点からも考察する複眼的な視点を育成することが必要であると考えられる。

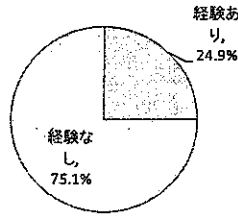


(4) アンケート

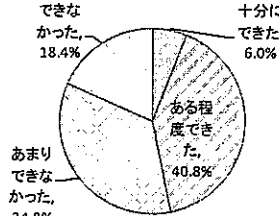
- Ⅳ
- (1) 中学校の社会、高等学校の地理・歴史の授業で、考えたことを積極的に発表した経験はありますか。  
 ア. あり（ありの場合は、大体の回数も解答用紙に書いておいてください）    イ. なし
- (2) 中学校の社会、高等学校の地理・歴史の授業の発表で、自分の考えを分かりやすく相手に伝えることができましたか。  
 ア. 十分にできた    イ. ある程度できた    ウ. あまりできなかった    エ. できなかった
- (3) 中学校の社会、高等学校の地理・歴史の授業の発表で、他の生徒の発表を聞いて理解できましたか。  
 ア. 十分にできた    イ. ある程度できた    ウ. あまりできなかった    エ. できなかった

発表についての調査結果からは、「(積極的に発表をした)経験あり」と回答した生徒は24.9%と少なく、発表回数も10回未

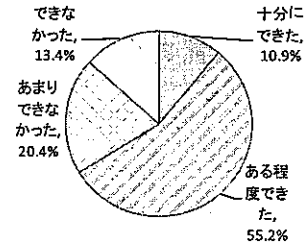
Ⅳ (1)



(2)



(3)



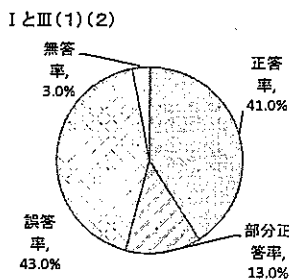
満である生徒がほとんどであった。また、発表経験のある生徒のうち、自分の考えを分かりやすく相手に伝えることが「あまりできなかった」「できなかった」と回答した生徒は53.2%であった。その一方で他の生徒の発表を聞いて「十分に理解できた」「ある程度理解できた」生徒は66.1%であった。

以上から、相手の発表を聞いて理解することはある程度はできるが、自分から発表する経験は少なく、発表してもうまく伝えることができなかった生徒が多いと言える。発表の機会を増やし意欲を高めることや、その内容を論理的に構成する力の育成が必要である。

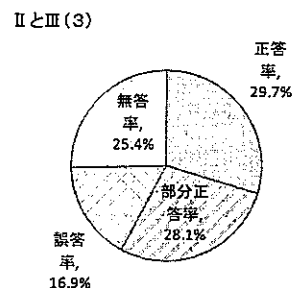
(5) レディネステストの結果分析のまとめ

基礎的・基本的知識や技能を問う問題 (Ⅰ及びⅢ(1)(2)) は、正答率が41.0%、部分正答率が13.0%、誤答率が43.0%、無答率が3.0%であった。また、思考力・判断力・表現力を問う問題 (Ⅱ及びⅢ(3)) は、正答率が29.7%、無答率が25.4%となっており、無答率で基礎的・基本的知識や技能を問う問題との差が大きいことも注目される。

基礎的・基本的知識や技能を問う問題



思考力・判断力・表現力を問う問題



以上レディネステストの結果分析をまとめると、基礎的・基本的知識や技能の身に付いてい

る生徒がいる一方で、それらが十分に身に付いていない生徒もいる。また、事象を時系列で捉える力、事象を位置や分布で捉える力、これらを踏まえて諸資料を活用し、多面的・多角的に考える力、自分の考えを表現する力などが不足している。そして、これまでの中学校の社会科、高等学校の地理歴史科の授業において自分の考えを発表する機会が少ない生徒が多いということも明らかになった。

従って、授業では時間軸と空間軸の複眼的視点を重視して歴史的アプローチと地理的アプローチを明確にするとともに、発表や論述の機会を増やすことによって、諸資料を活用して多面的・多角的に考察する力、自分の考えを論理的に構成し表現する力を育成する指導が必要である。

#### IV 研究の仮説

こうした生徒の現状を踏まえて、次の3点の仮説を立てて授業等の工夫を行い、検証することとした。

- 1 「江戸・東京」という身近な地域に即した諸資料を活用して時間軸と空間軸の両面から社会的事象を捉えさせることで、生徒の興味・関心を引き出すことができる。
- 2 社会的事象について時間軸と空間軸から捉えさせることで、多面的・多角的考察や因果関係に関する考察を促し、自らの考えをまとめたり決めたりする力を育成することができる。
- 3 諸資料を活用させることで、自らの考えを論理的に説明する力を育成することができる。

#### V 研究の方法

##### 1 具体的方策

検証授業に先立ち、我々の現状認識を裏付けるためにレディネステストを実施した。これを踏まえて、以下の3点を取り入れた検証授業を行い、その後、成果と課題をまとめた。

- (1) 生徒にとって身近な東京の地図、写真、統計、史料等を提示する。
- (2) 時間軸と空間軸の双方に関連する課題を設定し、歴史的アプローチと地理的アプローチを明確にしながら授業を構成する。
- (3) レポート作成、グループ討議、発表等、生徒自ら考えを表現する場を設定し、表現力を育成する。

##### 2 各科目における指導案の作成及び検証授業

四つの実践事例では、具体的方策で述べた3点を踏まえて指導案を作成し、検証授業を行った。その上でワークシート、アンケート等を分析し、次の3点を中心に成果と課題をまとめた。

- (1) 提示した資料によって生徒の意欲・関心を高めることができたか。
- (2) 社会的事象について時間軸と空間軸から捉え、多面的・多角的考察や、因果関係に関する考察をすることができたか。
- (3) 自らの考えを説明、論述で適切に表現することができたか。



## VI 研究の内容

### 1 研究構想

全体テーマ **新学習指導要領に対応した授業の在り方について**

高校部会テーマ **思考力・判断力・表現力の育成を図るための授業等についての実践研究**

#### 教科等における思考力・判断力・表現力とは

【思考力】 社会的事象について、諸資料を活用して多面的・多角的に考えたり、様々な事象を関連付けて考えたりする力

【判断力】 社会的事象について、諸資料を根拠にして、自らの考えをまとめたり決めたりする力

【表現力】 自らの考えを年表や地図などの資料を活用して、適切に伝えたり論述したりする力

#### 現状と課題

【現状】 社会的事象について、基礎的・基本的な知識・技能を活用して、多面的・多角的に考えたり、関連付けて考えたりすることが身に付いていない。また、考えたことを論理的に発表できない。

【課題】 社会的事象について、興味・関心をもたせるとともに、年表や地図などの諸資料を活用して、多面的・多角的に考察させ、歴史的視点と地理的視点の両方を踏まえさせること、その上で、主題を設定して行う学習等を充実させることが課題である。

#### 地理歴史部会主題

時間軸と空間軸の複眼的視点を重視した授業等についての実践研究  
～教科書「江戸から東京へ」を活用して～

#### 仮 説

- ・「江戸・東京」という身近な地域に即した諸資料を活用して時間軸と空間軸の両面から社会的事象を捉えさせることで、生徒の興味・関心を引き出すことができる。
- ・社会的事象について時間軸と空間軸から捉えさせることで、多面的・多角的考察や因果関係に関する考察を促し、自らの考えをまとめたり決めたりする力を育成することができる。
- ・諸資料を活用させることで、自らの考えを論理的に説明する力を育成することができる。

#### 具体的方策

- ・生徒にとって身近な東京の地図、写真、統計、史料等を提示する。
- ・時間軸と空間軸の双方に関連する課題を設定し、歴史的アプローチと地理的アプローチを明確にししながら、授業を構成する。
- ・レポート作成、グループ討議、発表等、生徒自らの考えを表現する場を設定し、表現力を育成する。

#### 検証・評価

- ・提示した資料によって生徒の意欲・関心が高まったかをアンケートによって検証する。
- ・社会的事象について時間軸と空間軸から捉え、多面的・多角的考察や、因果関係に関する考察を行い、自らの考えをまとめたり決めたりする力が育成されたかをワークシートやアンケート等から検証する。
- ・自らの考えを説明や論述で適切に表現することができたか、発表等の観察や自己評価等から検証する。

## 2 実践事例 I

科目名	江戸から東京へ	学年	第3学年
-----	---------	----	------

### (1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 単元名 「東京の都市化と大衆化」
- イ 使用教材 『江戸から東京へ』東京都教育委員会  
『日本史A 現代からの歴史』東京書籍  
自作プリント資料、ICT学習コンテンツ

### (2) 単元（題材）の指導目標

- ア 第一次世界大戦後における人々の生活の変化について多面的・多角的に考察させる。
- イ 身近な地域における土地利用の変化などを読み取ることを通して、都市化と大衆化の背景について考察させる。
- ウ 諸資料を活用して、自らの考えを表現させる。

### (3) 評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 資料活用 of 技能	エ 知識・理解
単元の評価規準	・東京の都市化と大衆化の特色に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究している。	・東京の都市化と大衆化の特色から課題を見だし、多面的・多角的に考察するとともに、その過程や結果を適切に表現している。	・東京の都市化と大衆化の特色に関する諸資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたっている。	・東京の都市化と大衆化の特色についての基本的な事柄を把握し、その知識を身に付けている。

### (4) 単元（題材）の指導計画（4時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準（評価方法）
1	大正デモクラシー	・原敬内閣が誕生した経緯及びその政策を理解する。 ・第一次世界大戦後、国内で社会運動が勃興したことについて理解するとともに、その背景について考察する。	・政党内閣の形成過程とその特徴について理解している。（発問・観察） ・図版や史料等から社会運動の勃興について読み取り、その背景について考察している。（ワークシート）
2	関東大震災の悲劇	・関東大震災の被害状況について、史資料等に基づいて理解するとともに、震災に伴って起った流言など、被害の多様な側面について、多面的・多角的に考察する。 ・東日本大震災にも触れ、防災の重要性を再確認する。	・図表や写真を活用して、関東大震災の規模を考察している。（発問・観察） ・二つの震災を通して、防災の重要性について認識を深めている。（ワークシート）
3	よみがえる東京	・関東大震災後における東京の復興の様子について、史資料等に基づいて理解する。	・写真や新聞資料等から建築様式の変化などを読み取り、東

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・視聴覚教材を視聴して、都市の復興計画とその過程について理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・京の復興の様子について理解している。(発問・観察)</li> <li>・視聴覚教材やワークシートを活用して、都市の復興計画とその経過を理解している。(提出物)</li> </ul>
4 本時	都市化と 市民文化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・産業構造の変化などからサラリーマンが都市部で増加したことについて理解する。</li> <li>・サラリーマンの増加による地域の変容や生活様式の変化について理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地形図や統計資料を基にして、サラリーマンが都市部で増加したことについて理解している。(提出物・考査)</li> <li>・身近な地域の資料を活用することで、地域の変容や生活様式の変化について関心を高めている。(発問・観察)</li> </ul>

(5) 本時（全4時間中の4時間目）

ア 本時の目標

- (ア) 実物資料や身近な地域の資料を提示することによって、生徒の興味・関心を高める。
- (イ) サラリーマンが都市部で増加した背景について、史資料などに基づいて理解させ、その特徴を多面的・多角的に考察させる。
- (ウ) サラリーマンの増加が地域の変容とどのように関係していたのかについて考察した結果をまとめさせ、発表させる。

イ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書『江戸から東京へ』の「学びの窓」から、昭和初期における都会生活の様子について、住宅の変化を通して考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グラフから関東大震災後に、サラリーマンが増加したことを読み取らせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和初期のサラリーマンの都会生活について関心を高めている。(ア) (発問・観察)</li> </ul>
展開	20分	<p>サラリーマンとは</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・サラリーマンとは、どのような人のことをいうのか、自分の考え（イメージ）を発表する。</li> <li>・史料を基に、大正から昭和初期の頃のサラリーマンの様子を理解し、サラリーマンが増えた背景について考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サラリーマンは事務職員として企業などに通う俸給生活者であることを理解させる。</li> <li>・雑誌『続サラリーマン物語』（1928年）などの史料を提示し、大正から昭和初期にかけてのサラリーマンの様子について理解させ、サラリーマンが増えた背景について考察させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サラリーマンについて、自分の考え積極的に発表している。(イ) (発問・観察・ワークシート)</li> <li>・史料を活用して、サラリーマンの様子について理解し、サラリーマンが増えた背景について考察している。(イ・ウ) (ワークシート)</li> </ul>

展開	20分	<p>サラリーマン誕生の背景</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・諸資料から品川区の産業構造の変化を読み取るとともに、日本経済の発展に伴い、都会の企業などで働くサラリーマンが増加したことを理解する。</li> </ul> <p>都市部における市民文化の成立</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・サラリーマンの増加には、中等・高等教育への進学率の高まりも関係していたことを理解する。</li> <li>・鉄道の発達や郊外都市の形成などによる生活様式の変化が、市民による新しい文化を生んだことを理解する。</li> <li>・品川区の人口構成の変化や私鉄の敷設などから、サラリーマンの増加と社会の変化の関係についてまとめ、発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒にとって身近な地域である品川区を事例に挙げ、新旧土地利用図の変遷（明治後期から昭和初期）や、産業別人口構成の特徴から産業構造の変化を読み取らせ、サラリーマンの増加について理解させる。</li> <li>・中等・高等教育への進学率の高まりの背景には、教育の振興政策とともに職業の多様化などがあったことを理解させる。</li> <li>・『わたしたちの品川』を参照させ、私鉄の開通時期と社会の変化が関わっていることを理解させる。</li> <li>・郊外における宅地開発の最も早い例が田園調布であることに触れ、私鉄の敷設と生活様式の変化を関連付けて考察させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・土地利用図や統計資料を読み取ることを通して、産業構造の変化とサラリーマンの増加を関連付けて理解している。(イ・ウ) (ワークシート)</li> <li>・サラリーマンの増加とその背景について理解している。(エ) (発問・観察)</li> <li>・資料を活用して、鉄道の開通と社会の変化について理解している。(イ・ウ) (ワークシート)</li> <li>・サラリーマンの増加と社会の変化について、資料等を踏まえてまとめ、発表している。(イ・ウ・エ) (発問・ワークシート)</li> </ul>
		まとめ	5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・都市化が進む中で、新聞などの情報媒体が大衆文化の興隆に影響を与えたことを理解する。</li> </ul>

## (6) 本時の振り返り

### ア 仮説の検証

#### (ア) 仮説1の検証

授業後に実施したアンケートにおいて、「今回の授業に興味・関心をもって臨むことができた」との回答が70%を超え、そのうち半数以上の生徒が、その理由を「東京や品川の歴史が取り上げられていたから」と記述していた。このことから、教科書『江戸から東京へ』

や品川区の資料を活用して、身近な地域に即して人々の生活の変化と社会構造の変化との関わりについて取り扱うことにより、生徒の興味、関心を高めることができたと考えられる。

#### (イ) 仮説2の検証

本授業は、時間軸と空間軸の双方に関連する課題として「サラリーマンの増加と地域の変容」を取り上げ、時間軸を「大正から昭和初期」とし、空間軸を「品川区」と設定した。

歴史的アプローチとして、前時までの学習を踏まえて大正から昭和初期にかけての人々の生活の変化を学習する中で、経済の発展に伴う産業構造の変化により、郊外に居住して都市中心部に通うというサラリーマンが増加したことを捉えさせるとともに、郊外都市建設や私鉄の敷設との関係について、多面的・多角的に考察させた。

地理的アプローチとして、品川区の土地利用図や産業別人口構成図等を活用して、同地域における産業構造の変化を具体的に考察させた。

提出させたワークシートの中には「郊外都市の建設や鉄道の敷設の背景について考察したことを述べなさい。」という設問に対して、「郊外に都市が作られたり、鉄道が伸びて地下鉄も開業したりした背景には、産業の発達に伴う東京の人口の増加や、関東大震災後の復興計画も深く関わっており、現在の東京の街並みにも関連していることが分かった。」など、歴史的条件と地理的条件を関連付けて社会的事象を複眼的に考察した記述が見られた。

#### (ウ) 仮説3の検証

昭和初期の資料や、地形図、統計資料を活用したことによって、歴史的事象を多面的・多角的に考察させることができた。また、発表の場を設定し、それらの諸資料を活用させながら自らの考えを論理的に説明するように促した。ワークシートには「品川区で人口が増加した背景には、経済の発展に伴って都会で働く人が増えたからだ分かった」などの記述も見られ、生徒は歴史的事象を諸資料を活用して説明しようとしていることが確認できた。

### イ 成果と課題

#### (ア) 成果

教科書『江戸から東京へ』と併せて、品川区教育委員会が発行した『わたしたちの品川』を活用し、日常生活の中で利用する鉄道が発展してきた経緯などに触れたことにより、生徒の興味・関心を高めるとともに、人々の生活の変化と産業構造の変化との関わりについて考察を促すことができた。また、雑誌や品川区の統計資料等の諸資料を活用して、時間軸と空間軸の両面から考察させる課題を設定することによって、複眼的な視点による多面的・多角的な考察を促すことができた。

#### (イ) 課題

身近な地域である東京に着目して、その都市化と大衆化の特色について理解を深めさせることができたが、同時期の東京以外の地域との差について十分に触れることができなかった。身近な地域に着目させることで生徒の興味・関心を引き出し、多面的・多角的な視点から因果関係を考察させるような授業を展開する際に、同時期の他地域にも配慮し、広い視野で歴史事象を考察する力を身に付けさせるよう、教材について工夫する必要がある。

### 3 実践事例Ⅱ

科目名	江戸から東京へ	学年	第3学年
-----	---------	----	------

#### (1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 単元名 占領下の日本  
 イ 使用教材 『江戸から東京へ』東京都教育委員会  
 『日本史B』実教出版、『最新日本史図表』第一学習社

#### (2) 単元（題材）の指導目標

- ア 占領下の東京の状況について、史料・年表・地図などを活用して多面的・多角的に考察させ、論理的に説明する力を身に付けさせる。  
 イ 戦後の諸改革がもたらした社会の変化について、都立高校の変化や練馬区誕生の背景などの身近な事例を通して考察させる。  
 ウ 戦後の諸改革の内容や日本国憲法の制定、平和条約の締結などについて理解させる。

#### (3) 評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 資料活用の技能	エ 知識・理解
単元の評価規準	・ 占領下の東京や戦後の諸改革の特色に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究している。	・ 占領下の東京や戦後の諸改革の特色から課題を見だし、国際環境と関連付けて多面的・多角的に考察するとともに公正に判断して、その過程や結果を適切に表現している。	・ 占領下の東京や戦後の諸改革の特色に関する諸資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	・ 占領下の東京や戦後の諸改革の特色についての基本的な事柄を、国際環境と関連付けて理解し、その知識を身に付けている。

#### (4) 単元（題材）の指導計画（5時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準 (評価方法)
1	占領下の東京	・ アメリカ合衆国を中心とした連合国による占領政策の特色を理解する。 ・ 「五大改革指令」の内容を考察し、占領政策の目的について理解する。	・ 占領政策の内容や特色、目的について理解している。 (発問・ワークシート)
2	新制都立高校の始まり	・ 本校の歩みを通して終戦前後の都立高校の様子や変化を考察し、教育の民主化について理解する。	・ 写真や記録などから、都立高校の様子や変化を考察し、教育の民主化について理解し、まとめ、発表している。 (発問・ワークシート・発表)
3 本時	練馬区の誕生	・ 練馬区が板橋区から独立した経緯について考察するとともに、日本国憲法の制定や地方自治制度の整備など日本の民主化の流れについて理解する。	・ 練馬区の独立について、地図や史資料を活用して考察し、自らの考えをまとめ、発表している。 (発問・ワークシート) ・ 日本国憲法について基本的

			な知識を身に付けている。 (発問)
4	日本の独立	<ul style="list-style-type: none"> <li>占領終結の背景と日本独立の意義について考察し、平和条約や日米安全保障条約の内容とその影響について理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の独立をめぐる国際社会の状況について、地図や史料を基に考察している。(ワークシート)</li> <li>米軍基地が日本に存在する歴史的背景を理解している。(発問)</li> </ul>
5	終戦後の文化	<ul style="list-style-type: none"> <li>手塚治虫の漫画「鉄腕アトム」を活用して、民主主義の在り方や科学の振興など終戦後の文化の特色を考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>民主主義の広がりや科学の振興などについて、史料を基に考察している。(発問・ワークシート)</li> </ul>

(5) 本時 (全 5 時間中の 3 時間目)

ア 本時の目標

(ア) 民主的な地方自治の進展をめぐる状況について、練馬区設置の運動を通して考察する。

(イ) 日本国憲法制定の過程とその特色について理解する。

イ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 (ア～エ)
導入	5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科書『江戸から東京へ』に掲載されている「東京 22 区案」を見て現在との違いを理解し、「なぜ練馬区が設置されたのか」という本時のテーマを把握する。</li> <li>昭和 16 (1941) 年の旧板橋区の地図を見て、どこの区の地図なのかを考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>昭和 22 (1947) 年 3 月の時点で練馬区が存在していなかったことに気付かせる。</li> <li>鉄道の駅名など身近な地名に注目させて考察するよう促す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>旧板橋区が現在の練馬区を含むものであったことを理解し、本時のテーマについて興味・関心をもっている。(ア) (観察)</li> <li>地図情報を基に現在との違いについて考察している。(イ・ウ) (発問・観察)</li> </ul>
展開	10分	<p>練馬独立運動の始まり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>東京市域を示した地図を基に区制の変遷とその背景を考察する。</li> <li>旧板橋区の地図や練馬の独立宣言の資料を基に、練馬の住民が独立を願った理由を考察し、発表する。</li> </ul> <p>日本国憲法の制定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>日本国憲法制定の過程とその特色について理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口増加によって東京市域が拡大したことを指摘する。</li> <li>区役所の利便性の問題が練馬の独立の気運を高めたことを、資料を基に説明させる。</li> <li>GHQ案は、日本政府側が作成した憲法案を否定したうえで作られたものであることを指摘する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人口増加など区制の変遷をもたらした背景について考察している。(イ・ウ) (ワークシート)</li> <li>練馬独立の背景について資料を基に考察し、自らの考えを発表している。(イ・ウ) (発問・観察)</li> <li>日本国憲法制定の過程とその特色を理解している。(エ) (発問)</li> </ul>

展開	30分	<p>練馬区の成立</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地方自治法の制定による都政の変化を理解する。</li> <li>・地方自治法施行が練馬の独立運動に影響を与え、練馬区が誕生し、現在に続く「東京 23 区」が成立したことを理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・首長公選制が、日本国憲法の理念に基づくことを理解させる。</li> <li>・日本国憲法と地方自治法の施行が同じ日であることが、理念の共通性を示すことに留意させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公選制が日本国憲法の理念に基づくことを理解している。(エ) (発問)</li> <li>・地方自治法施行が練馬の独立運動を後押しし、「東京 23 区」が成立した経緯を理解している。(イ・エ) (発問・ワークシート)</li> </ul>
まとめ	5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の内容を振り返り、理解したことや気が付いたことなどをワークシートにまとめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・机間指導を行いながら、本時の内容をまとめられるように、適切に指示する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の授業で理解できたことや気が付いたことを適切にまとめている。(イ) (発問・ワークシート)</li> </ul>

## (6) 本時の振り返り

### ア 仮説の検証

#### (ア) 仮説 1 の検証

本時は教科書『江戸から東京へ』を活用し、戦後まもなく東京都に練馬区が新設された歴史的背景を考察した。身近な地域に即したテーマを設定することで、生徒の歴史に対する興味・関心を高めることができた。このことは、現在の練馬区を含む旧板橋区の地図を熱心に眺める生徒の姿が見られたことや、「自分たちの住む地域にこのような歴史があるとは知らなかった」、「調べれば他にもいろいろなことが分かりそうだ」など、ワークシートに記入された意見・感想からも確かめることができた。日本国憲法制定の過程に関しては、民主主義をめぐる近代日本の思想的伝統について追究する態度を養うことができた。

#### (イ) 仮説 2 の検証

時間軸と空間軸の双方に関わる課題として、本時では「なぜ練馬区が独立したのか」という問題を設定し、時間軸を「戦前から戦後」とし、空間軸を「練馬地域」とした。

歴史的アプローチとして、練馬区設置に関わる年表と史料を活用した。戦前から始まる練馬独立運動の時間的推移を理解させ、日本国憲法の制定や民主的法制の整備などを始めとする戦後の民主化政策との関係に着目させながら、練馬の独立宣言文がもつ歴史意義について考察させることができた。

地理的アプローチとして、地図や資料の読み取りを行った。旧板橋区の領域が他の区と比較して広大であること、区役所が区内東端に位置していること、面積・人口のデータから練馬地域は新設区として十分に成り立つことなどを生徒に考察させることで、練馬地域の人々が新区設置を望んだ背景を理解させることができた。

授業中の発問による生徒の回答や「練馬の独立は占領下の中でもすでに進められていたものであり、日本国憲法の制定が大きな後押しになったことが分かった」というワークシートの記述内容などから、「日本の民主化の流れ」を時間軸と空間軸の複眼的視点から多面的・多角的に考察させることによって、我が国の歴史の大きな流れを捉えさせることができたことが分かった。



#### (ウ) 仮説3の検証

授業の中で、地図や資料を提示した際に分かりやすいことから難しいことへ段階を踏んで発問をすることで、地図や資料の理解を深めさせるとともに生徒の段階的な思考を促す工夫を行った。発表の際には、生徒は提示した資料を活用しながら練馬の独立の要因について説明していた。また、授業のまとめとしてワークシートに学習内容を記述させたところ、旧板橋区の地図と練馬区史に基づいて区役所をめぐる生活上の利便性について言及したり、練馬独立宣言の史料から当時の社会状況に着目して地方自治を柱とする民主化の流れが独立を実現したことを指摘したりする内容が多く、学習した内容を資料と関連付けて論理的にまとめられていた。

#### イ 成果と課題

##### (ア) 成果

「練馬区の独立」をテーマに据え、教科書『江戸から東京へ』を活用し、東京都制の施行や地方自治の進展を取り上げた項目を学習させた。多くの生徒が「練馬区が板橋区から独立したとは知らなかった」という驚きに近い関心を示しており、通史学習の中に地域史の素材を効果的に組み込むことが学習意欲を喚起する有効な方法であることが実証できた。

時間軸と空間軸の複眼的視点を生み出すために、戦前から戦後における練馬独立運動の展開を時間的な推移として捉えさせ、東京の区制及び板橋と練馬の地域的な位相の変化を空間的に把握させた。定期考査において練馬区設置の背景を説明させたところ、約80%の生徒が時間軸と空間軸の複合的な視点から答案を作成できていたことは大きな成果である。

また、提示した諸資料が示す内容を筋道立てて考察させることによって論理的な思考力を育成するとともに、諸資料を活用してワークシートに自らの考えを論述したり発問に対して発表させたりすることによって、言語活動の充実を図り、表現する力を育成することができた。

##### (イ) 課題

課題の一つに、地域史を通史学習の中でどのように位置付けるかという点がある。身近な地域に即したテーマによって構成される授業は、生徒の興味・関心を引き出すうえで有効であるが、単なるエピソードに終始しない工夫が必要である。地域史学習が通史の理解を補完するような展開をいかに実現できるかが課題であり、教科書『江戸から東京へ』は、この課題解決に向けて研究するのに当たって大変適した教材である。

次に、科目間の連携を重視した指導をいかに充実させるかという点がある。レディネステストの結果から、公民科の知識が十分ではないこと指摘したが、日本国憲法の成立に関する学習内容などは、公民科をはじめとする他の教科・科目との連携を十分に図ることが必要である。

最後に、議論や発表の機会を設定することの難しさという点がある。生徒に自らの意見や考えを述べさせることは比較的容易であるが、それを生徒同士の議論にまで高めるためには様々な工夫が必要である。本時の検証授業では生徒を主体とした議論などを実践するところまでは及ばなかった。今後の課題としたい。

#### 4 実践事例Ⅲ

科目名	世界史B	学年	第1学年
-----	------	----	------

##### (1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 単元名 アメリカ合衆国の独立と発展
- イ 使用教材 『詳説世界史』山川出版社  
『グローバルワイド最新世界史図表』第一学習社  
『江戸から東京へ』東京都教育委員会

##### (2) 単元（題材）の指導目標

- ア イギリス本国と13植民地との関係が七年戦争を境に変化したことを考察させ、13植民地がイギリス本国から独立する過程を理解させる。
- イ 史料を活用してアメリカ独立宣言の主旨を理解させ、その対外的影響を考察させる。
- ウ 白地図作業によって西部開拓の進展について整理させ、その過程でおこった地域的対立が南北戦争の主たる原因となったことを理解させる。
- エ フロンティア消滅の過程において、アメリカ合衆国に対するアメリカ先住民の抵抗があったことを理解させる。

##### (3) 評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 資料活用の技能	エ 知識・理解
単元の評価規準	・アメリカ合衆国の独立や、独立後の西部開拓の進展、南北戦争の過程などに対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。	・アメリカ合衆国の独立や独立後の発展の特色を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	・アメリカ合衆国の独立に関する諸資料を収集し、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	・アメリカ合衆国の独立やその後の発展の過程についての基本的な事柄を把握し、その知識を身に付けている。

##### (4) 単元（題材）の指導計画（4時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準（評価方法）
1	北アメリカ東部13植民地の形成	・北アメリカ東部の13植民地の形成の過程と、北部と南部の産業構造の相違について考察する。 ・イギリス本国の重商主義の強化によって13植民地に独立の気運が高まったことを理解する。	・13植民地の形成の過程とイギリスからの独立の原因について理解している。（発問・考査）
2	アメリカ独立戦争とアメリカ合衆国の成立	・アメリカ独立宣言の史料を読み、内容を理解し、独立宣言の対外的影響について考察する。 ・合衆国政府の特色を理解する。	・アメリカ独立宣言の資料を読み取り、その内容や対外的な影響について考察している。（発問・考査）

3 本時	西部開拓とアメリカ合衆国の領土拡大	<ul style="list-style-type: none"> <li>・白地図記入作業によってアメリカ合衆国の領土拡大の過程について理解する。</li> <li>・先住民の視点から西部開拓を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカ合衆国の領土拡大の過程を理解している。(ワークシート・考査)</li> <li>・先住民の視点から西部開拓を理解している。(ワークシート)</li> </ul>
4	南北戦争	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒人奴隷制に対する北部と南部の対応の相違から南北戦争の背景を理解する。</li> <li>・リンカンの奴隷解放宣言の発表の意図を考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南北戦争に至る過程を理解している。(発問・考査)</li> <li>・奴隷解放宣言が発表された背景にあった北部の意図を考察している。(発表・考査)</li> </ul>

(5) 本時 (全4時間中の3時間目)

ア 本時の目標

(ア) ペリーが日本に来航した理由について考察させ、当時のアメリカ合衆国の状況に興味・関心をもたせる。

(イ) 白地図記入作業を通して、独立時の北アメリカ東部を基点としてアメリカ合衆国の領土が西部へと拡大していく過程を理解させる。

(ウ) アメリカ合衆国による西部開拓の過程で、アメリカ先住民の抵抗があったことを理解させる。

イ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 (ア～エ)
導入	10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1853年にペリーが日本に来航した理由を考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書『江戸から東京へ』を活用して、日本の開国について考察させ、1853年頃のアメリカ合衆国に興味・関心をもたせる。</li> <li>・「太平洋」を通じてアメリカ合衆国と日本が繋がっていることに着目させ、アメリカ合衆国の対清貿易の拠点として日本の開国が必要であったことに気付かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペリーが日本に来航した理由について考察し、当時のアメリカ合衆国の状況について興味・関心をもっている。(ア) (発表)</li> </ul>
展開	30分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカ合衆国の領土拡大</li> <li>・白地図記入作業からアメリカ合衆国の領土拡大の過程を理解する。</li> <li>・アメリカ合衆国による西部開拓に対してアメリカ先住民の抵抗があったことを理解する。</li> <li>・アメリカ合衆国の領土拡大の過程について自らまとめ、発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料集と白地図を参考にして、アメリカ合衆国の領土拡大について理解させる。</li> <li>・資料集からアメリカ合衆国の領土拡大は先住民に対する征服活動でもあったことを理解させる。</li> <li>・アメリカ合衆国の領土拡大の過程について、西部開拓やアメリカ＝メキシコ戦争などの側面</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカ合衆国の領土拡大の過程について理解している。(ウ) (ワークシート)</li> <li>・アメリカ合衆国による西部開拓に対してアメリカ先住民の抵抗があったことを理解している。(エ) (ワークシート)</li> <li>・アメリカの領土拡大の過程をまとめ、発表している。(イ) (発表)</li> </ul>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカ合衆国の領土拡大とペリーの日本来航との関連について考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・から多面的・多角的に考察させる。</li> <li>・アメリカ合衆国と日本の位置関係について地図を活用して考察させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>表・ワークシート)</li> <li>・アメリカ合衆国の西部開拓の延長線上に日本が位置することを考察している。(イ)(観察・ワークシート)</li> </ul>
まとめ	10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカ合衆国の領土拡大における、1853年のペリーの日本来航の意味を考察し、まとめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ペリーが1853年に日本に来航したことを含めて、アメリカ合衆国の領土拡大の流れをまとめさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカ合衆国の領土拡大とペリーの日本来航を関連付けてまとめている。(イ)(ワークシート)</li> </ul>

## (6) 本時の振り返り

### ア 仮説の検証

#### (7) 仮説1の検証

教科書『江戸から東京へ』を活用し、ペリーの日本来航について考察させた。中学校の歴史的分野の学習における生徒の視点は日本へのペリー来航であるが、本授業ではアメリカ合衆国からの視点をも考察させた。アンケートでは、「今まで、日本へペリーが来航したことによる影響ばかり意識していたが、アメリカの事情についても考える必要があり、様々な見方をしなければならないことが分かった。」など、多角的・多面的に歴史的事象を考察させ18世紀のアメリカ合衆国の領土拡大について生徒の興味・関心を高めることができた。

#### (イ) 仮説2の検証

カリフォルニアを獲得するきっかけとなる「アメリカ＝メキシコ戦争」を時間軸の中心とし、アメリカ合衆国独立後の「北アメリカ東部」を空間軸の基点と設定した。

歴史的アプローチとして、アメリカ合衆国の独立からアメリカ＝メキシコ戦争までの領土拡大を理解させるとともに、ペリーが日本に来航した1853年に着目させた。

地理的アプローチとして、アメリカ合衆国の領土拡大について白地図記入作業を通して、西部開拓を理解させるとともに、資料集の「排除されてきた先住民」を活用して、アメリカ合衆国の領土拡大は先住民に対する征服活動の側面もあったことも考察させた。

ワークシートの中には「西部開拓の背景には、先住民の抵抗やメキシコとの戦争など多くの争いがあったことが分かった。」という記述が見られ、アメリカ合衆国の領土拡大について、アメリカ合衆国の独立からアメリカ＝メキシコ戦争までの時間軸と北アメリカ東部から西部への空間軸との複眼的視点から、多面的・多角的に考察していることが分かった。

#### (ウ) 仮説3の検証

アメリカ合衆国の白地図や資料集の年表を活用させ、アメリカ合衆国の領土拡大の過程をまとめさせるとともに、発表では諸資料を活用してアメリカ合衆国の領土拡大について説明させることができた。全ての生徒が時間の経過とともに、アメリカ合衆国の領土が西へ拡大していていることを理解し、発表では地図を使いながら「大西洋から太平洋へアメリカ合衆国の領土が拡大している」という表現を使う生徒もいた。また、ワークシートには資料集の資料を活用して「アメリカ合衆国の領土拡大の中で生じた課題に、追いやられた先住民の問題がある。」と記述した生徒もおり、アメリカ人の先住民に対する行動と、

それに対する先住民の抵抗を理解した上で、アメリカ合衆国の領土拡大は視点を変えると先住民に対する征服活動であったことを多面的・多角的に考察させ、表現させることができた。

## イ 成果と課題

### (ア) 成果

今回の研究授業では、教科書『江戸から東京へ』の活用、時間軸・空間軸の複眼的視点からの歴史的事象の考察、自らの考えの論理的な説明の3点に重点をおいて取り組んだ。

1点目は、世界史Bの授業において、どのように教科書『江戸から東京へ』を活用すれば、効果的に生徒の興味・関心を高め、思考力、判断力、表現力を養うことができるか考えた。今回は、品川台場を題材にして、日本から見たペリーの来航とともにアメリカ合衆国に視点を変えて見たペリー来航について考察させ、導入とした。教科書『江戸から東京へ』を活用することによって、生徒は非常に興味・関心を高めて授業に取り組んだ。

2点目は、社会的事象を時間軸と空間軸の複眼的視点から生徒に捉えさせるために、アメリカ合衆国の白地図や資料集の年表などを活用した。そして年表を参照しながら白地図の作業を行うことによって、諸資料が関連付けられて理解されるようになり、アメリカ合衆国の領土の拡大について多面的・多角的に考察し、まとめることができるようになった。

3点目は、アメリカ合衆国の領土拡大を時間軸と空間軸を意識させながら発表という形で説明させた。アメリカ合衆国はどのようにして領土を獲得し拡大していったのか、諸資料を活用しながら分かりやすく説明できるようになった。アンケートの結果から、アメリカ合衆国の領土拡大の過程について、約70%の生徒が、筋道立てて論理的に説明できるようになったと回答した。

### (イ) 課題

本時終了後、仮説を検証するためにアンケートをとった。教科書『江戸から東京へ』の活用については、生徒の意欲・関心がおおむね高まったことが分かった。しかし、世界史の諸資料として教科書『江戸から東京へ』を活用する場面は少なく、今後どのように活用するかは研究を重ねる必要がある。

また、時間軸と空間軸の関連付けについては、12.5%の生徒に十分に理解させることができていなかった。歴史的アプローチと地理的アプローチの関連付けが不十分であり工夫が必要である。西部開拓と日本へのペリー来航の関わりについて、空間軸としての西方への領土拡大の延長線上としてのペリーの日本来航は理解させることができたが、時間軸としてのアメリカ＝メキシコ戦争とペリーの日本来航との関係を十分に理解させることができなかった。

レディネステストでは、中学校の時に自らの考えを論理的に説明できた生徒は少ないという結果がでた。本時では白地図作業から、自らまとめ、論理的に説明する力を育てることを目的として発表する場を設けたが、分かりやすく十分に説明できない生徒もいた。アンケートの「自分の考えを分かりやすく説明できる」という項目ではまだ27.5%の生徒が「自信がない」「できない」と答えている。一方で、95%の生徒がワークシートには自らの考えをまとめることができたと回答しており、今後、表現力を育成するために発表の機会を計画的・効果的に設定することが課題である。

5 実践事例Ⅳ

科目名	地理A	学年	第1学年
-----	-----	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 単元名 「自然環境と防災」
- イ 使用教材 「世界を学ぶ高校生の地理A」 帝国書院、「基本地図帳」 二宮書店  
『江戸から東京へ』 東京都教育委員会  
1/50000 地形図（東京首部、東京西南部、東京西部、東京南部）  
自作プリント2枚、東京都建設局発行浸水予想図（ハザードマップ）

(2) 単元（題材）の指導目標

- ア 学校周辺や生徒の通学圏である生活圏の地形の特色と土地利用の変遷を考察させる。
- イ 地形の高低差等から水害の危険性を理解させ、防災に対する意識を高めさせる。
- ウ 「江戸から現代」という時間軸、「東京東部」という空間軸によって東京の生活空間の特色を多面的・多角的に考察させる。

(3) 評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 資料活用の技能	エ 知識・理解
単元評価規準	・生活圏の課題に対する関心と課題意識を高め、環境条件と人間生活の関わりから意欲的に捉えようとしている。	・生活圏の環境条件や地域に生きる人々の生活及びその相互関係を多面的・多角的に考察し、適切に表現している。	・生活圏の環境条件と人間生活との関わりについて、地形図や江戸古地図等から読み取ったりまとめたりにしている。	・生活圏の環境条件と人間生活との関わりを、多面的・多角的に理解している。

(4) 単元（題材）の指導計画（3時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準 (評価方法)
1	武蔵野台地と東京低地の高低差とその成因	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活圏の地形図の 20m 等高線をなぞり、標高を示す数字を囲むとともに、台地を侵食した河川に着色して、西の台地部と東の低地部、侵食谷の位置や広がりを確認する。</li> <li>・台地や低地での人々の生活の様子について理解する。</li> <li>・東京東部西側は古多摩川による隆起扇状地であり、東側は河川の多い三角州で、昔から洪水の発生しやすい場所であることを理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作業に対して意欲的に取り組み、地図情報を読み取っている。(観察)</li> <li>・低地に適応した人々の生活を理解している。(ワークシート)</li> </ul>

2	江戸時代の東京低地の水害対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利根川・荒川の流路の付け替えについて、流路変更を白地図作業で確認しながら、その土木工事の理由などを考察する。</li> <li>・東京低地は水害対策とともに水運や農業用水の利用によって発達したことを確認する。</li> <li>・江戸時代の古地図から土地利用を読み取って発表するとともに、現在も残る地名を確認し、土地利用の変化や土地の改変について考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利根川などの流路の付け替えの理由について考察している。(ワークシート・発問)</li> <li>・古地図を読み取り、土地の改変等について考察している。(ワークシート・発問)</li> </ul>
3 本時	現代の東京低地の水害対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水害の被害地域を班で予想した後、ハザードマップを配布し、どのような地域が被害を受けやすいのかを読み取る。また、生徒の居住地域の危険度や避難場所を班で考察し発表するとともに、防災意識を高める。</li> <li>・現代の水害対策にはどのようなものがあるか、プリント及び教科書で確認する。</li> <li>・3時間分の授業内容をまとめるレポートについて、体裁やまとめ方等を解説する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既習内容とハザードマップから水害発生地域を把握している。(ワークシート・観察)</li> <li>・ハザードマップ等から避難場所を考察している。(ワークシート・発表)</li> </ul>

(5) 本時 (全3時間中の3時間目)

ア 本時の目標

- (ア) 東京東部の環境条件を現代と江戸時代とを比較しながら捉えさせる。
- (イ) 東京東部の水害危険地域について、地図や資料を活用し、思考・判断し表現させる。
- (ウ) 生活圏の地形と水害の関係を通して、現代の水害対策について考察させるとともに、防災意識を高める。

イ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 (ア～エ)
導入	10分	東京東部の環境条件の復習 <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業開始から班別で活動する。</li> <li>・1/50000 地形図 (A3で2枚) を活用して、東京低地の標高を確認し、江戸時代の土地利用について復習する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地形図教材を配布して、東京低地は沖積平野、三角州であること、水害被害を受けやすいことを再確認させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京東部の環境条件を江戸時代と比較して捉えようとしている。(観察) (ア)</li> </ul>
展開	30分	東京東部の水害危険地域 <ul style="list-style-type: none"> <li>・現代では、どのような地域が水害を受けやすいか予想し、ワークシートに記入する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現代においては、どのような場所が水害被害に遭いやすいか、と発問する。</li> </ul>	

展 開	30 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京低地部のハザードマップを1/50000 地形図に重ね、浸水被害について生徒の居住地域のどこが危険な場所なのかを読み取るとともに、避難場所について考察しまとめ、班ごとに発表する。</li> </ul> <p>現代の水害対策</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現代の水害対策として、ダム、地下放水路（調整池）、スーパー堤防、水門などの役割を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トレーシングペーパーに印刷したハザードマップを居住地域ごとに編成した班に配布し、ハザードマップを地形図と重ねるよう指示する。</li> <li>・水害対策の概要をまとめたプリント2を配布し、話合いの内容を裏面に記入させる。班での話合い後、発表させる。</li> <li>・防災意識を高めさせるよう留意する。</li> <li>・現代の水害対策を説明し、プリントに重要語句を記入させる。教科書を使用して写真等を見せる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・避難場所について班で協力して作業をしてまとめて発表している。（観察・発表・ワークシート）（イ・ウ）</li> <li>・資料から読み取った内容を自分たちの生活に引き付けて考察している。（観察）（イ）</li> </ul>
ま と め	10 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業内容をA4、1枚程度のレポートにまとめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まとめ方の方法や様式などを指示する。締め切りを指定する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レポートを意欲的にまとめようとしている。（レポート）（ア・イ）</li> </ul>

## (6) 本時の振り返り

### ア 仮説の検証

#### (ア) 仮説1の検証

本校生徒の自宅や通学圏が含まれる地形図を使用したこと、またこの地域のハザードマップや江戸古地図を用いたことで、生徒の興味を引くことができた。また江戸古地図の利用では、過去の土地利用や水害対策を、現在と比較して取り上げたことにより、資料活用の意義が深まった。生徒からは「渋谷が田舎だったのが意外」「自宅が水害の被害に遭うかもしれない。」という反応が見られた。授業後のレポートでは、自分の居住地域などの水害情報を自主的に収集してまとめた生徒は74.3%（提出生徒数は164名）という結果となった。以上の理由から授業への興味とともに学習意欲も高まったと考えられる。

#### (イ) 仮説2の検証

本授業は、空間軸と時間軸の双方に関連する課題として「水害対策」を取り上げ空間軸を「東京東部」、時間軸を「江戸から現代」と設定した。地理的アプローチとしては東京東部の河川の位置や低地の広がりをつ捉えるとともに、東京東部の河川という環境条件と人間生活との関連を考察させた。歴史的アプローチでは前時の江戸時代の学習を踏まえて現代の水害対策を学習する中で、水害対策が時代の推移とともにどのように変化したのか捉える



とともに、江戸時代と現代の水害対策の相違点等を考察させた。その成果として以下の二点が挙げられる。

第1は「水害対策」である。対象空間である東京（江戸）低地部の江戸と現代の水害対策を比較し、水害対策の違いやその変化を地理的アプローチ及び歴史的アプローチを明確にして説明した。江戸の水害対策の例として利根川と荒川の流路変更を、また現代の水害対策として堤防や調整池などを例示し、流路変更前と変更後、そして現代という3段階の状態を比較した結果、各時代において水害に対して様々な工夫があったことや、水害対策後の環境の変化を理解させることができた。レポートでも、江戸の洪水対策と現代の洪水対策を併記している生徒は54.8%であった。

第2は「土地利用の変化」である。現代の地形図と江戸古地図を読み取って比較する活動を取り入れ、地域的特色とその変化や人間生活と地域環境の関連を地理的アプローチ及び歴史的アプローチを明確にして説明した。土地の高低差による町人地と武家地という土地利用の違いを、江戸城の防御や水運という要因とともに説明し、その後市街地が拡大したことを説明したことで、江戸の人々の生活と環境の関わりに関する考察を促した。レポートでは、江戸時代の水害対策の結果、江戸東部が開発されていった点に触れている生徒は51.8%となった。

#### (7) 仮説3の検証

班構成を居住地域別とし、生徒にとって身近な地域の浸水被害を予想させることで、議論が活発となり考察を深めることができた。おおむねどの班でも自居住地域の土地の高低差と水害の関係は理解していた。避難場所については議論し場所を特定する中で情報を共有するとともに、防災意識も高めさせることができた。またレポートで「授業で取り上げた時間的・空間的な視点で、『江戸東京と水害』というテーマ説明ができるか」を検証した。この結果、複数の視点（地形形成について、江戸の水害対策、現代の水害対策、江戸期と現代の土地利用などのうち三つ以上）を挙げることができた生徒は54.2%という結果となった。事象説明に対して多面的な視点を生徒全員が十分に表現できたとは言えないが、授業の内容及び自分の活動を言葉で表現させることは、生徒自らの考えをまとめるよい機会になったと考えられる。

### イ 成果と課題

#### (7) 成果

生活圏の資料として、現代の地形図・江戸古地図・ハザードマップを取り入れたため、生徒の興味・関心が平常より格段に高まるとともに、時間的・空間的な視点を考察させることができた。論述に関しては、生徒に文章表現の機会を与えることができた。また、ハザードマップ等から避難場所を考察させることで防災意識を高めさせることができた。

#### (4) 課題

作業等の多さや、多面的・多角的な視点に混乱している生徒も見受けられた。1時間に1テーマ、班活動は1時間に1回とし、議論と説明の明確な区分をするなどを徹底すれば、改善されると考えられる。論述に関しては、「論のまとめ方」「文章の書き方」などの指導を十分に行うことができず、レポートの体裁などに問題がある生徒が26.9%という結果となった。さらに論述の機会を設定し、生徒の言語能力を向上させていく必要がある。

## VII 研究の成果

「身近な地域に即した諸資料を活用して時間軸と空間軸の両面から捉えさせることで、生徒の興味・関心を引き出す」という点に関しては、ねらいどおりの成果を上げることができた。地形図や古い地図などの中から自分の住んでいる場所を探し出すという作業を通じて、生徒は授業の内容を自分の生活に関わりのあることとして捉えることができ、積極的に取り組んでいた。また、地図等の資料を詳細に見ることで、生徒が新たに興味をひかれることを発見するなどして、学習に対する意欲を高めている様子もうかがえた。

「時間軸と空間軸から捉えさせることで、多面的・多角的考察や因果関係に関する考察を促す」という点についても、生徒に「独立13州」、「東京」、「板橋区」など、地域の枠組みを具体的に示し、その中で時間の推移と事象の変化を捉えさせることで、生徒は時間軸と空間軸の複眼的視点の考察から多面的・多角的な考察へと導かれたと言える。生徒の考察を促すためには、授業者がワークシートや発問を通じて生徒から既習事項を引き出し、それを新しく学ぶ内容につなげ、その関連を考えさせるような展開を取り入れることが、生徒の参加意欲を一層高める効果をもつ、ということも今回の授業実践の中で改めて認識された。

「論理的に説明する力」という点については、授業者が作成したワークシートを使用し、発問や助言を与えることを通じて、生徒が段階的に思考を進めることができるように工夫することで、数行程度の比較的短い記述については明らかに成果がみられた。

## VIII 今後の課題

身近な地域や事物を取り上げることは、生徒の興味・関心を引き出す上では極めて有効な方法であるが、他方では学習内容に関わるエピソード的な扱いとして終わってしまう恐れもある。今回の事例の中では、特に世界史において、その課題をクリアすることが難しかった。学習内容と取り上げる事物とを有機的に結び付け、生徒が学習内容そのものを自らの身に引きつけて考えることができるようにするためには、提示する資料の精選、授業展開の緻密な構築といった点で、更に工夫を重ねていくことが必要である。また時間軸・空間軸という視点を打ち出したことで、世界史・日本史・地理の科目間の連携は十分に意識されたが、考察をより深めていくためには、現代社会との関わりという視点をもっと強調することも考えなければならないであろう。そのためには、公民科をはじめとする他の教科・科目との連携を進めていくことが求められる。

また、考察に広がりをもたせるために、一つの学習内容についてもより長い(短い)時間軸・より広い(狭い)空間軸の取り方をしてみることや、同じ時間軸において他の空間軸と比較・対照をしてみることも考えられるであろう。具体的にいうならば「東京」に着目するとともに、同時代の他の地域や世界の様子と対比させる、といった展開を取り入れることである。

発表については、生徒に自らの意見を述べさせる段階までは比較的容易に進めるが、それを生徒同士の議論にまで高めていくための方法については、更に研究を深めていかなければならない。また記述、論述についてもワークシート形式での数行程度の記述から、200字～400字程度のより本格的な論述へと発展させていくことを視野に入れて、長期的な見通しの下に授業を構想していくことが必要である。

## 平成23年度 教育研究員名簿

### 高等学校 ・ 地理歴史

学 校 名	課 程	職 名	氏 名
都立荒川商業高等学校	定時制	主任教諭	○伊藤 昌彦
都立広尾高等学校	全日制	教 諭	沢田 綾
都立小山台高等学校	定時制	主任教諭	◎武藤 正人
都立武蔵丘高等学校	全日制	教 諭	太田尾 智之
都立永山高等学校	全日制	教 諭	鳥羽 顕司
都立南平高等学校	全日制	主任教諭	三藤 政義
区立九段中等教育学校	全日制	主任教諭	松岡 孝

◎ 世話人 ○ 副世話人

[担当] 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課  
 指導主事 南 和男  
 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課  
 課務担当係長 小林 正人

平成 23 年度  
教育研究員研究報告書

高等学校 地理歴史

東京都教育委員会印刷物登録

平成 23 年度第 181 号

平成 24 年 3 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課

所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号

電話番号 (03) 5320-6836

印刷会社 有限会社 シーダー企画